第4章　武四郎とアイヌ民族

武四郎は、蝦夷地の調査を進める中でアイヌ民族がどのような立場におかれ、どのような仕打ちを受けているかを知ることになります。彼は苦しむアイヌの人びとを救うため、幕府に提出した報告書の中で、松前藩の場所請負制度などを批判する内容を記載し、命を狙われることになりますが、屈することなく、その後の著作でもアイヌの人々の生活をありありと書き続けました。その最たるものである『近世蝦夷人物誌』は、アイヌ民族に関する初めてのルポルタージュと呼べるものでありましたが、幕府の許可が下りず、出版することは叶いませんでした。ただ、武四郎は他にも『蝦夷地名奈留辺志』や『蝦夷漫画』などアイヌ民族に関する刊行物を出版しており、苦しい生活を強いられながらも、自然を敬い、仲間と助け合いながら暮らすアイヌの人びとの姿や文化を描いていきます。

出版不許可

『近世蝦夷人物誌　初編・二編・三編』

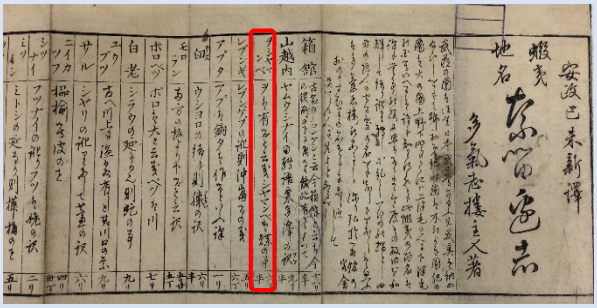
全99節にわたり、民衆のために奮闘する指導者や長生きの者から、身体が不自由な者、踊り上手な者まで、100人以上のアイヌの人びとを取り上げています。

アイヌ民族、役人ともに実名を挙げ、また役人から不当な扱いを受けるアイヌの人びとの姿についてもありのまま記したことで出版不許可となりましたが、明治45（1912）年から2年間、京華日報社の雑誌『世界』で連載されたことにより、ようやく人々の注目を浴びることになりました。

このような武四郎の姿は、ドナルド・キーン氏が『続百代の過客』の中で「『近世蝦夷人物誌』における松浦ほど、己の同胞をきびしく批判した人物も珍しい。」と記しているとおり、当時の世間の概念を覆すものだったと言えるでしょう。

出版許可

『蝦夷地名奈留辺志』安政6（1859）年刊



折り帳仕立ての本。「箱館」から海岸沿いを反時計回りに一周して「松前」までの78ヶ所の地名とそのアイヌ語の解釈、次の土地までの距離が記されており、例えば、「ヲシヤマンベ」（長万部）には、「ヲは有ると云義　シヤマンベは鰈（かれい）の事」とあります。

安政5（1858）年末に『近世蝦夷人物誌』とともに上梓願を提出し、こちらは出版が認められました。

『蝦夷漫画』安政6（1859）年刊

この時代の「漫画」は、現代の漫画とは意味合いが異なり、「気の向くままに描いた絵」を指します。
絵は全て武四郎によるもので、アイヌ民族の生活文化を色彩豊かに描いています。

下段：犬を巧みに使って船を動かす樺太アイヌ民族

上段：オヒョウの樹皮を織る様子

武四郎が好んだアイヌ民族の伝統舞踊「鶴の舞」